臥牛

大分県立竹田高等学校
関東同窓会
会報
第10号

発行者・会長 伊東七五三八
編集者・足立五郎
発行所・関東同窓会事務所
東京都中央区築地2—7—12
15山京ビル2階205号
03—3543—8747

印刷(株)イフ・フォーラム
東京都新宿区早稲田鶴巻町552
千田ビル302 ☎03—3207—8064

平成五年度会務報告

幹事長　佐藤映之（昭・28年卒）

第七回総会、懇親会は平成五年六月十九日ホテルグランドパレスに於て一七〇名の出席のもと開催した。総会は会務、会計報告、新役員の選出、懇親会は当番幹事のご尽力で落語等を聞きながら終始和やかであった。以下紙幅の都合もあり要点のみご報告したい。

・6月19日（土）第七回総会懇親会於グランドパレス

・7月2日（金）役員会、於学士会館、総会の結果確認と問題点、顧問会議の実施について。

・8月6日（金）役員会、於学士会館、第七回総会の反省会並びに運営担当者の慰労会の実施、秋の幹事会の招集、顧問会議の議事進行について。

・8月21日（土）顧問会議、於学士会館、同窓会運営全般について、出席十三名。

・9月3日（金）役員会、於学士会館顧問会議におけるご意見、ご提案等について。

・10月1日（金）役員会、於学士会館、秋の幹事会の運営について。

・11月4日（木）秋の幹事会、各種委員会〈合同〉於学士会館、第七回総会、懇親会の結果報告と次回への提言、維持会費の徴収のあり方、各委員会からの提案、当番幹事からの経過報告等々。

・12月5日（金）役員会、於学士会館、第8回総会懇親会と、副幹事長の長期療養のため代行要員について。

・2月4日（金）役員会、於学士会館、春の幹事会招集について。

・3月4日（金）役員会、於学士会館、第8回総会、懇親会の具体的準備及び維持会費の徴収方法と維持会員の増強について。

・4月15日（金）春の幹事会、〈各種委員会、当番幹事合同〉於学士会館、第8回総会懇親会開催の具体的実施計画について、当番幹事より準備進捗状況説明、総務委員会より維持会員の増員協力要請等。

第八回、関東同窓会開催予告

麻生　巌（昭・28年卒）

一、とき　平成六年六月二十五日土曜日　午後一時より

一、ところ　新高輪プリンスホテルパミール館3F「香雲」港区高輪三ノ十三ノ一

一、会費　男　八〇〇〇円　女　七〇〇〇円

一、イベント　〝岩戸神楽〟古里の深山神楽座

一、お土産　竹田銘菓〝荒城の月〟出席者全員にプレゼント（当番幹事　28・38年卒）

クラス会情報

・昭20年卒、5月29日（日）6.00～於別府市「白菊」

・昭25年卒　11月12日（土）於大分市　場所未定

同　関東竹高25会　日時未定

・昭26年卒総会　6月10日（金）於博報堂クラブ　6.00～8.00

幹事　松田・和田

〝岩戸神楽〟を東京に呼びます！

私たちの古里には、数々の神楽座がありますが、どの神楽座も後継者難の中で昭和四十一年県の無形文化財の指定を受け歴史と伝統のある正統な流技を忠実に継承に努めておられる朝地町神楽保存会の深山神楽座の皆さんをお呼びします。

深山流は、朝地町の深山八幡社に伝わる岩戸神楽です。この深山流には江戸時代に記された「神楽大事」という巻物があり、神楽ごとの趣意や舞い方が記され今に伝承されているそうです。

神楽の巻物には、番付、人数、装束採物、舞方が記録されており、その舞方は「深山流」という独特な舞方をなし、この舞方は朝地町を中心に大野、直入郡地方に分布し、明治以降急速に民間に浸透し今日に至ったものと考えられています。

巻物は「序文」に始まり「神楽大事」、そして神楽三十六番の解説があり、日本書記に書かれている説話を物説的に「舞」として組み立てられています。

（深山流神楽解説より）

さて今回はお神楽三十六番中何番の舞を見られるか大変楽しみですネ。

都心の一流ホテルで昔なつかしい古里の〝岩戸神楽〟をお楽しみ下さい。

ぜひ先輩・同輩・後輩の皆さんお誘い合わせてのご出席を、心よりお待ちいたしております。

訃報

波多野次彦さんが、亡くなりました。お見舞いに行った時、病名がはっきりしなかったのは、癌の告知が無かったためだと、亡くなった後で分かりました。

波多野さんは荻町の出身で、昭和三十三年高校を卒業後、会計検査院に勤めてこられました。

関東同窓会発足以来、幹事、組織委員として、また昨年からは副幹事長として活躍され、特に無料奉仕で同窓会名簿を一人で作成され、毎年総会で出席者全員に配布しておりました。

名簿は、会員の動静把握、通信連絡、コミニュケーションのために欠かせないものです。しかし、その作成は大変根気のいる神経の疲れる細かい仕事です。波多野さんはこれを一人でやってくれました。

波多野さんはまだ五十四歳という若さであり、これからが期待されていた方でした。同窓会にとっても、なくてはならない人材でした。

本当に惜しまれてなりません。心から哀悼の意を表します。

クラス会

第四十四回生クラス会

森田　耕吉
（昭・20年卒）

我々第四十四回生は、平成三年十月十九日（豊肥線開通の日）ホテル岩城屋でクラス会を開催いたしましたが、先般同級生の元県立図書館長佐藤和秀君の葬儀に参列した有志が「県内在住者のクラス会をしょうや」と言うので、熊谷恭直、室明、渡辺通男及び私が幹事となり、竹田市内の料亭ひら山で二十八名が参集して盛大に開催されました。閉会後、後藤市長を始め十数名で、後藤市長や中野竹田図書館長の教え子が経営する酒場おかつに繰り出し、深夜遅くまで二次会を行い気勢を上げました。

参加者は、安藤武・粟生幸男・阿南清文・赤嶺幸一・岩尾順・板井基裕・河野智明・熊谷恭直・後藤宗昭・亀島弘・加藤義一・佐伯荘志・柴尾昭生・首藤雄一・中野廣士・橋爪淳一・秦高夫・本田忠夫・平田信幸・松岡孝一郎・室明・森仁三・森田耕吉・矢野二郎・渡辺忠直・和田孝士・渡辺通男・佐藤孝喜の諸君でした。所用のため出席できなかった伊藤昭華・渡辺隆君より過分の寸志を頂き感謝いたしております。

閉会に先立ち、渡辺写真館長により記念写真を撮影し、後日私より各人宛に御送付いたしました。

平成七年は、卒業五十周年の節目を迎えるので、全員参加のクラス会を開催したいと考えています。

初秋の箱根仙石原で

四宮　坦
（昭・20年卒）

昨年九月二十七、八日の両日に竹中四十四期生クラス会を箱根仙石原のパレスホテルで催し、十名が集った。

この会は、先の六月の関東同窓会の総会に於いて弁護士の伊東君が会長に選出され、その折、出席した同期生が会長就任の激励を兼ねて関東地区でのクラスを開催しようということになり、計画されたものである。

竹田からの出席者は四名、後藤市長は災害復旧の陣情の帰途出席し、翌早朝に竹田に向けて発つという多忙ぶり。クラス会は夕刻六時に始まり伊東新会長の抱負発表、引続き後藤市長から台風十三号による災害情況と復旧対策についての説明。やがて話題は動員時代の思い出に集中し、ほろ酔い談笑は夜半まで続く。我々、昭和二十年卒は軍需工場への二度目の動員中の卒業で、卒業アルバムらしいものはない。がしかし、みんなが夫々の心の中に描いているアルバムを、談笑の中に垣間見る事が出来て嬉しかった。

初秋の気配を感じさせる翌朝、渡辺君の心盡くしのカボスを手土産に箱根の山を降りる者、堀君の世話によるゴルフを楽しむ者とに別れ、互いの健康と再会を祈念して散会。

参加者・朝倉三郎・足立五郎・伊東七五三八・伊東昭英・工藤正勝・後藤宗明・谷川昭一・堀健一・渡辺道男・四宮坦。

青春の思い出がよぎった2日間

高辻紀代
（旧姓上好・昭・38年卒）

多分ディーゼルが緒方駅に着いた時だったと思う。私は誰か知っている人でも乗って来るのではないかと気持ちが高ぶっていた。目の置き場のない様な、恥かしい様な落ち着かない自分が妙に変だった。列車が止まり、二両程の車両の前から後ろからどやどや乗って来た。もしかしてあの人そうではないかなあなどと思っていると、その人は中程の人に手を振って私の横を通り過ぎ後方の席に座った。はずんでいる会話などからして、どうも私と同様三十年ぶりの三八会に出席する人達に違いないと思った。（因にその人は会の抽選会で冷蔵庫が当たり私は印象に残った）。　こうして心の中では既に同窓会が始まっていた。早朝埼玉を発った疲れもなく、ますます心は高鳴るばかりだった。

やっとホテル岩城屋に着き、受付に立った頃になると幾分か平生を取り戻していた。六組は山村節子さんが座っていた。少しも変わっていないと思った。原田さんがいて、足達さんや朝倉さんがいて、その内岩下さんも来て、親友の河野さんも来た。唯ただ懐しいばかりだった。大体の方は名前は出てこなくても顔を見てすぐ思い出せた。しばらく「まあー。」とか「わあー。」とか感激が続いた。

会場の大広間ではおいしそうに盛られた料理を中央に席が作られ、何人かは座っていた。会は土居武志さんの威勢のいいユーモアたっぷりの司会により和やかに進められた。物故者追悼に始まり、高野さんのことば、後藤市長、尾西校長先生のご挨拶、そして大橋イチ子さんの魅力的な声での恩師紹介。みんな懐しい先生方を拝見したいと首を伸ばし、目はステージに釘づけになっていた。この一瞬程三十年の隔たりを感じた事はないだろう。初老を迎えられた先生もおられる。かつての面影を残された尾西先生・城下先生・阿南先生・田北先生・都留先生・原尻先生の方々が目の前に立たれた。心の奥深くにしまわれていた青春の日々の思い出が瞬間横切っていった。この様な会に臨まない限りこんな気持ちになる事はないだろう。未熟なままの青春の一コマ、思い出したくもあり、思い出したくもないそんな一コマがほろ苦く思い出された。先生がいて、友がいてこその高校生活だったのだと気づいた。忘れかけていた感謝の気持ちが込み上げてきた。尾西校長先生の懐しの授業再現の名講演にも心を打たれた。同窓会はクラス会と会場を変え、宴は一段と酣になり、かつて密かに思いを寄せていたなどの甘酸っぱい話も出て盛り上がった。沢山の人と懐しくおしゃべりをし、別れた。会は翌日には奥豊後を散策するバスハイク、更に「おおはし」での二次会と延々と続き終った。

高野さんを初め在郷の方々には本当にお世話になり頭の下がる思いがした。暖かい歓迎を受け、十七歳に戻れた忘れられない二日間となれました。

（文中の姓は旧姓）

クラス会

卒業四十周年記念クラス会異聞

後藤浩一（昭・27年卒）

「近頃どげんふうな……」

「元気にしちょるな……」

懐旧の言葉が飛び交う。竹田の街なら、ごく普通のクラス会、同窓会の光景であろう。

ところが、ここは日本有数の景勝を誇る観光地・箱根である。竹田が、そっくりの引っ越してきたような賑わいのなかで、昭和二十七年竹高卒業・第四期生四十周年記念総会が開かれた。平成四年十一月二十二～三日のことである。

頭に白雪を頂いた富士山タイプ、煌煌と輝く電灯不用派、漆黒染髪ヤングふうと、面々とりどりだが、五十有余年の風雪を刻んだ表情は、故旧相懐しむ喜びにあふれている。それぞれが再会の喜びを分かちあうなかで、時空は逆回転を始めていた。

開宴――八十歳の齢を感じさせないかくしゃくたる恩師・堀三ちゃん（堀三郎先生。めんなさい往時の親しみをこめたニックネームで呼ばせていただきます。）の箸のタクトのもと、校歌を斉唱する。何年ぶりに歌ったであろうか。青春時代が甦り、この感動は筆舌につくしがたい。歌いながら感激して、心のなかで涙したのは、私ひとりではあるまい。

――呑むほどに、酔うほどに、一同は変身を始める。もうここには、六十歳代に手の届こうとする者は、ひとりも居ない。歌い、喋り、肩を組む姿は、十代の竹高生そのものに完全脱皮していた。

宴は、二次会、三次会と、何時はてるともなく続く。

事件が起きたのは、日付が代わった翌二十三日、午前三時頃であった。

蒲団にもぐっても、あちこちでよもやま話に花が咲き、合間に寝息が交差する。

私は感動のあまり寝そびれて、心地よい酔いに包まれながら青春懐古に浸っていた。

突然、「寒い、寒い」と、芯から寒そうな声をあげながら、バスタオル一枚の男が飛び込んできた。吟聖ことS君である。

如何に温泉とはいえ、天下の峻・箱根の初冬である。寒いのは当然だ。

訝る私に彼はぼやいた。

「三次会のメンバーと、もうひと風呂浴びたんだ。いい気分で、たっぷり温まって出てみたらえらいこっちゃった。脱衣場に俺の浴衣、羽織はおろか、シャツもパンツもない。脱衣籠のなかに唯ひとつ、ブルーのパンツが残っているだけなんだ。俺は生まれて此の方、色物のパンツなんかはいたことがないのに……」

バスタオルの下は、生まれたままのスッポンポンだという。

「困ったな」

と私は応じながら、吟聖の困惑した表情と恰好がおかしくなって、笑いを噛み殺すのにひと苦労だった。

後に聞いたのだが、一緒に入浴したT君、M君は、吟聖のバスタオル姿を見て、笑いが何時までも止まらず、いったん部屋に戻ったものの、先に眠りについている仲間を起こすといけないので、廊下に出て抱腹絶倒したそうな。

私の推理するに、この謎のブルーのパンツの主は、"酔眼朦朧パンツ一枚"のいでたちで出湯を楽しみ、酔余の他意ない錯覚で、吟聖の一式を着用して部屋に戻ったようだ。この酩酊紳士の名前は武士の情で公表しないことにする。事件のしめくくりに一句。

吟聖の
パンツや何処　冬の宿

事件が事件を呼んだのか、翌日、またしてもパンツ事件が発生した。

宴の余韻を残して一同は賑やかに、朝湯を楽しみに出かけたのだが、大浴場へ通じる階段の手摺に、なんとパンツが掛けられているではないか。今度は、ブルー変じてホワイトである。場所が場所だけに、そして物が物だけに、皆んなギョッとするか、不審に思いながらも、そこは城下町・竹田出身の紳士らしく、気付かぬふりをしてさり気なく通りすぎたようだ。

一同、湯浴みを堪能して再び部屋へ戻るのだが、その時分には件のパンツは、忽然として姿を消していた。

きっと、ホテル側が処理したものだと、だれしも思ったにちがいない。私もそう思っていた。

ところが、真相はホテル側の関知しないところにあったのだった。

夫婦で仲睦まじく出席した、某賢夫人が、例の手摺の前を通りかかったのを目撃した者がいる。

夫人はパンツを目にするや『あら、ウチ（夫）のだわ』とおっしゃって、手早く折りたたみ持ち去られたそうだ。

何の変哲もない、何処にでもある白いパンツを、ひと目で"ウチ（夫）のだわ"と看破した夫人の慧眼に、私は敬意を表したいが、それはさておいて、看破とか慧眼と表現するのは、用語の使用を誤っているような気がする。

看破や慧眼ではなく、最愛の夫が日常肌につけているものである。きわめて仲の良い夫婦愛のなさせる業、あるいは掌編愛情物語とでも解釈するのが自然で妥当であろう。

何が夫人をして"ウチ（夫）のだ"と特定させたか、麗しい夫婦愛について興味をお持ちのむきは、返信用封筒同封のうえ、私の親友『まんちゃん』にお問い合わせになればよろしかろうと存ずる。

帰途の車中、パンツ事件は話題の主役をつとめたが、文字に写してみると些細な出来事である。しかし、そこには、旧友たちの屈託のない心の底からの交遊と、笑いを伴った感動があった。その深奥には、故里・竹田があり、学舎・竹高が見える。胸の裡には、若々しく、永遠に息づく青春がある。

先輩を訪ねて

お客様とき ところ

中川清次様
平成六年三月二日
学士会館　談話室

聞き手　足立五郎
記録者　三尾まゆみ

中川清次氏略歴

昭和4年、竹田中学校卒業（第28回生）、　同年第5高等学校入学。7年、同校卒業、同年東京帝国大学工学部造兵学科入学、10年、同校卒業。同年、横河電機製作所入社。47年、定年退職。48年、日本科学技術情報センター嘱託。57年、同退社。

――本日はありがとうございます。大変お元気そうでございますが、何か特別な健康法などなさっていらっしゃるのですか。

中川　いいえ、特別に注意しているようなことはありません。少々血圧が高いので降圧剤を飲んではいます。タバコはすいませんが、お酒は毎晩です。

――失礼ですが、今年でおいくつになられますか。

中川　この三月六日で82歳になります。わたしの誕生日は、今の皇太后と同じです。昔は、地久節と言って女学校ではお祝いの式がありました。天皇誕生日の天長節は中学校でもお祝いをしていましたが、地久節は女学校だけでした。私の誕生日を女学生が祝ってくれていると自慢したものです。

――ご趣味についておたずねいたします。

中川　特に趣味というものはないのですが、ハイキングに行きます。富士山や北岳なんかにも登りました。同好の会の人と奥多摩によく行きました。60代はみんなの先頭にたって歩いたものですが、四、五年前からはついて行けなくなったので、一緒に出歩くことは少なくなりました。

――竹田中学校時代の思い出などお聞かせくださいませんか。

中川　私は、第28回卒業ですが、一五〇人入学したのに卒業までに三〇人近く減り、今は一六人しか残っていません。この級で自慢したいのは会員の生死がはっきりしていることです。これは、幹事を引き受けてくれている古沢良一君の非常な努力によるもので、なかなかできることではないと感謝しています。

足立さんの頃も、入学して間もなくのマラソンがありましたか。

――私たちの頃は、毎月二七日で、濁淵までの往復でした。

中川　そうですか。私の入学した年は竹田の町から拝田原を通って玉来の町を抜けて松本の入口から折り返したものです。何でそんなことを言い出したかというと、その最初のマラソンで私は急性腎臓炎になり一月学校を休んじゃったんですよ。その間何も勉強しないで学校に行ったら、数学の時間に当てられたんですよ。私は、当然出来ませんと応えたら叱られちゃった。先生のお考えでは、自習しておくべきだということだったと思います。私は、なるほど小学校とは違うんだなあと実感しました。

中学校の行事としては秋の運動会があります。近くの小学生を招いての八〇〇メートルリレー競争があることもあって、一般の人の見物もあり、校門の前の道に露店が出るなどにぎやかでした。陸上競技のほかに銃をかついでの隊列行進や模擬戦もありました。

秋の終りには、野外演習がありました。例えば緒方まで行軍し、あそこの麦畠で散開前進をするのですが、畠を荒らす了解はとってあったのでしょうか。一泊で七里田まで行ったこともあったように思います。

一月に武道の寒稽古がありました。当時は体育の授業として武道の時間があり、剣道か柔道かどちらかをすることになっていました。寒中は毎朝五時から六時まで学校で稽古したわけです。近くに住んでいる者は朝食に帰りますが、遠くの者は徒歩通学ですから帰る時間がなく、朝食も弁当でした。始業まで時間があるので、町に出て商店の看板を移動するなどいたずらをする者もあったようです。

――それは、私どもの時も引き継がれていました。

先生の思い出話もたくさんあると思いますが。

中川　物理の林勝見先生を思い出します。先生のことは数年前の「臥牛」に載った「臥牛城は、どこから見た形か」という記事でお読みになった方も多いと思います。竹田の町のご出身で、今でもお宅が昔と同じ形で山川にあります。同じ竹田の方に北村清士先生がおられます。先生はご長命で、28回卒業生の卒業後50年記念の同級会にも出席していただきました。ちょっと変わった先生として、矢嶋君の出た臨時数学教員養成所を出たばかりの若い数学の先生がいましたが、教室で落語を話したり、授業時間に碧雲寺に連れて行ったりしました。絵を趣味にしていて、同好者とヌードを含む絵の展覧会をキリスト教会で開いたことがあります。まだまだ自由のあった時代だったわけです。余談ですが、小説家の川上宗薫はその教会の牧師の息子です。

――東京帝国大学工学部造兵科といえば、私達の大先輩青木保さんが教授をなさっていましたが。

中川　そうです。同窓生名簿の最初が工学博士青木保東京帝国大学工学部教授で、他に一回には、農学博士黒野勘六醸造試験所長もおられ、博士が二人とは竹田中学校もたいしたものだと思ったものです。造兵の兵は兵器のことで造兵学科は他の大学にはありません。学生は、兵器専攻か精密機械専攻かを選ぶことになっており、精密機械を選んだ私は、青木先生の魚雷と時計の講義を受けました。

造兵学科を出られた先輩としてパーカライジングの里見雄二さんがおられます。一学年の定員が一七名のこの学科はまとまりがよく、そろって遊びに行ったものです。先生方と学生との仲も親しく、楽しい学生生活を送りました。

――郷里竹田では、岡城の復元問題がありますが、このことについてはどのように考えられますか。

中川　うーん、どうかな。あまり賛成できないですね。何も無いほうが荒城にふさわしいのではないでしょうか。

――長時間、楽しいお話をありがとうございました。ますますのご健勝をお祈りいたします。

会員の語らい

古い日記より

渡辺正治
（旧姓足立・昭・10年卒）

昭和十二年二月十五日。
（その頃、旧制五高生で熊本大江町に下宿していた）
映画「荒城の月」を一人で見に行く。故郷竹田の生んだ天才、滝廉太郎の印象として自分の心に抱く人物像と、画中の人物が一致して何とも言えない、いい気持ちであった。どこか信州辺りらしい古城の雰囲気が、岡城のどこかに似ている。
あの枯草の城址を作曲の冥想に耽りながらさ迷い歩くあたり、何かたまらない吸引力を覚えた。あれこれ思えば、今にも帰ってノート一つを携えて古城を歩き回りたくなる。
同二月十六日。
昨日来「荒城の月」と古城の感興に耽っていた折から、今日の大阪毎日の夕刊に大きく「名曲を生んだ岡城址」として、滝氏が土井晩翠氏の詞について作曲する前に、自分の歌詞によって作曲せんとしていた事を報じている。
古城と題するその歌詞は
一、外堀は　田にすきかへされ
　内堀は　年毎にあせて
　二百年の　名残やなに
　水草いる辺に　橋枕朽ちて
　野菊咲くかげに　石ずえ残る
　一の木戸か　二の木戸か
　（あなあわれ）
二、君候の住みなれし　大殿いづら
　武士の侍いし　広間はいづら
　春霞　かすみかこめし
　秋霧の　立ちかかくせる
　ただ麦季で　豆実る　あなあわれ
　狐なく　あなた出丸の跡
　月寒き　こなた天守の跡
三、上つ葉に　朝日させば
　君が千歳の　色さかえ
　下つ葉に　夕風ふけば
　君が八千代の　歌ほぎし　千本の松はや
　昨日やうつつ　今日は夢
　枝折られ　幹裂かれ
　誰が家の　薪となれる
　誰が宿の　煙となれる
　千本の松　残るははや　五もと六もと
四、一夜星くらく　雨ほそき夜半
　老松の上枝の魂と　下枝の魂と
　ふたりよりあひて
　空しくならむ　君恩を
　泣きてささやく　声しきり
注……歌詞の四は、恩師、北村清士先生著「滝廉太郎を偲ぶ」により補充した。なおこの詩の原文は、滝廉太郎令妹安部とみ夫人から寄贈され、竹田市立図書館の記念室に保管されている由である。

ひと味違う旅の楽しみ方

河野吉光
（昭・42年卒）

海外旅行もすっかりポピュラーになり、観光、視察、ビジネス、ショッピングとその目的も多様となりました。私の勤務する旅行センターでは、ひと味違う旅のお手伝いをさせて頂いています。写真クラブが撮影会を主催し、大竹省二先生、秋山庄太郎先生といった著名写真家を囲む写友の会の旅になることもあります。
一年に一〇回前後企画しているこのツアーですが、いつも満席でキャンセル待ちが出る盛況ぶり。最近では「大竹省二と行く欧州撮影の旅」が企画されました。まずはドイツのミュンヘンからスタート。大竹先生の指導によりBMW博物館内でモデル撮影。古い車と金髪美人モデルとのコントラストが素晴らしく、ひとしきりシャッター音が響きます。場所を市街の中心マリーン広場へ移しマリア像と歴史的な建物を背景に撮影した後、ロマンチック街道をバスで南下します。

ミューヘン街頭で

その美しい姿から白鳥の城とも呼ばれる名城ノイシュバンシュタイン城のあるふもとの村に到着。チェックイン後、徒歩でお城へ向かいます。みなさんファインダーに入った獲物は逃すまいと夕日が沈むまでシャッターを切り続けていました。夕食会では、撮影の成果を語り合い、新たな写友の輪が広がります。この後、フュッセンより国境を越えアルプスを撮りながら、インスブルック、モーツァルトの生誕地ザルツブルグ、そしてドナウ河畔の古い街メルク、バッハウ渓谷、ウィーンと撮影の旅は続きます。
旅のファインダーを通し、文化、歴史を堪能し、人々と触れ合い、さらに写友の輪が広がっていきます。
旅行の際には、カメラは不可欠です。大いに活用して、楽しい思い出を記録に残し、もうひとつの旅を演出することが出来ます。あなただけの旅のアルバム、この春作ってみませんか？
数年前、このツアーと同じ様に、「久住高原撮影会」を企画し、岡城址も撮影地に入れ大成功に終りました。この5月にも、「阿蘇撮影会」を企画しており、再び岡城址を撮影地に加える計画です。
写真を通して、「歴史と文化の薫るまち竹田」を紹介出来たら良いと思います。

大分・熊本行き航空券・25％割引き致します（ピーク時は除く。）
日本空輸㈱・銀座旅行センター
TEL3571＝3811（河野）

癇（かん）の強かった廉太郎

吉場伸子
（旧姓岩下・昭・38年卒）

このごろは、ちょっとした滝廉太郎ブームのようです。映画「わが愛の譜」はもちろん、東芝EMIの同名のCD、コロムビアの「滝廉太郎全曲集」も好評のようです。そこで、既に皆さんご存知かと思いますが、滝廉太郎にまつわるエピソードをいくつかご紹介します。
○荒城の月の作詩者土井晩翠と廉太郎は会ったことがあるのでしょうか。実は「荒城の月」を作曲して三年後、ドイツのライプチヒから、結咳のために志半ばにして傷心の帰国の途中に、晩翠が留学していたロンドンで、短い時間会ったのが最初で最後でした。
○廉太郎より十八歳年上の従兄大吉（ダイキチ）氏は、関東大震災で倒壊してしまった浅草の十二階ビル（当時の観光名所）を建てた建築家でした。廉太郎は父親に、音楽は男のする仕事ではないと反対されていましたが、大吉氏は建築物は消失してしまうが、音楽は後世に残ると、音楽の道を進む廉太郎を励まし続けました。
○廉太郎は赤ちゃんの頃、癇が強くてよく泣く子でしたが、音に非常に敏感で歌を歌ったり、楽器の音を聴かせたりするとピタッと泣き止んだということです。当時の滝家には尺八、三味線はもちろん、明治初期には珍らしいヴァイオリンとアコーディオンがありました。又、竹田の教会で洗礼を受けて、教会のミサ曲も廉太郎に大きな影響を与えました。

知っちょるつもり

（その一）「狐頭さま」

工藤隆浩（昭・54年卒）

今年の三月二〇日から三日間、玉来の街に祭りの太鼓の音が響き渡った。

竹田市の西部、玉来の街を見下ろす小山の上に鎮座するのが通称「狐頭さま」と呼ばれる「扇森稲荷神社」である。

国道五七号線から太鼓の音に導かれて参道を進むと、頭上高くそびえる巨大な朱色の鳥居が迎えてくれる。夕方になれば、若者たちの待ち合わせ場所となる駐車場も車に溢れ、参拝の車の列は国道まで伸びて一キロ程も続く。

参道の両側には飴屋やイカ焼屋さらに玩具屋、植木屋と様々な出店が並び、醤油の焼けた香ばしい匂い、ザラメの焼けた甘い匂いを漂わせて、空腹時にはとても無事には境内までたどり着けそうもない。変わったところでは陶器や長靴、竹製品といったものを売る店まであり、ポテトフライやクレープなどの店が結構はやっていたりするのは時代の流れか。そういえば数年前まではテキヤの顔役が仕切って出店の区割を行っていたのが、今は暴対法の関係で警察官が行っているのも又時代の流れといえよう。

百件近くの出店の列が途絶えると、そこから「百段」とよばれる急な石段が境内に向かって真っ直ぐ登っている。かつては、奉納された鳥居がさながら、赤いトンネルのように「百段」を覆って並んでおり、その中をくぐって登るのに風情があったが、現在の「百段」は十年程前に拡張され、名物の鳥居のトンネルは一部を残して無くなってしまい残念がる声が多い。

境内にたどり着くと太鼓や鐘の神楽の囃子につられ、つい足取りも軽やかになるようだ。囃子に加えて参拝客のざわめきや縁起物を売る威勢のいい掛け声が、祭り場独特の喧噪となり、蠟燭と線香の煙に燻されて聖地としての雰囲気を醸し出す。

春の大祭は旧暦の初午（ハツウマ）の日を挟んで三日間行われる。「午」とは方角で言えば南、時間で言えば正午を意味し、いずれも陽気の頂点に達する時であり、春の仕事始めはこの頃から始まる。

この初午の大祭には県内各地はもとより、九州各地、遠くは中国・四国方面からも熱心な信者が訪れる。

信者には商売を営む方が多いが、農業・商業だけでなく県南や四国地方の漁業関係者が多く訪れ、漁業繁栄や航海の無事を祈願して行く。

稲荷神社に奉られている三人の神様のうち、保食大神（ウケモチオオカミ）は

「人の命を守り育てる」

「五穀食物を守る」

「商売繁盛、商取引を守る」

「一年中幸福守護」

「漁業繁栄守護」

といった御神徳を持つ神様で「狐頭さま」が農業・漁業も含めた商売の神様と称される所以であろう。ちなみに猿田彦命（サルタヒコノミコト）は先払いの神、大宮女命（オオミヤノメノミコト）（アマノウズメノミコト）は芸能の神とも言われる。

献上される供物には狐の好物の油揚げが多いが、時には鯽や鯛などの海の幸が届けられ、「狐頭さま」の「キツネ」をおおいに喜ばせる。

「狐頭さま」は元和二年、二代岡藩主中川久盛候が、京都伏見稲荷から御心霊を遷して創祠し、十二代藩主久昭候がさらに造営し、「扇森稲荷神社」と名づけ現在に至っている。

通称の「狐頭さま」と呼ばれる由来は定かではないが、次のような奇聞が伝えられている。

ある夜、貧しい老いた産婆が仕事を終えて帰ってみると美しい女がたっていて、自分の家にお産があるから加勢してくれと言う、ついて行ってみるとなんと稲荷山の上の狐穴であった。気味悪く思ったが親切心から一心にお産を手伝って無事子どもを生ませた。翌日、狐からお礼に見事な大鯛が届けられ、老婆はおおいに喜んだ。だが、その日、城下では殿様に献上する大鯛が盗まれ大騒ぎになり、老婆が盗人として捕らえられ、死罪にされることになった。そのとき狐は、自分のために老婆が死罪になることを知り、老婆に化け身代わりとなった。処刑された死骸を見ると狐であったので人々は大いに驚き、また狐の恩返しに心をうたれて、その狐の霊を祀った。そして穴の中には白狐の頭が現在も残っていると伝えられる。

祭りが終わると「狐頭さま」は、また静かな杜に戻って行く。拝殿の前にたたずむ石造の狐は慈愛に満ちた目でこれからも多く人々の願いを聞き届けて行くことだろう。

（写真提供　後藤喜志子さん）

宝石の旭
宝石・真珠・貴金属
株式会社 旭商店
代表取締役 橋爪康二

帝国ホテル店	帝国ホテル地下1階アーケード	☎ (3503) 2528
プラザ店	インペリアルプラザ4階	☎ (3501) 2731
日比谷店	日比谷パークビル商店街	☎ (3271) 9336
旭アートセンター	日比谷パークビル商店街	☎ (3271) 6260
新宿店	新宿住友ビル地下1階	☎ (3344) 6874
池袋店	サンシャインシティアルパ1階	☎ (3985) 7753
外商部	日比谷パークビル商店街	☎ (3212) 5800

ふるさと便り

竹田の近況

――『竹田の寺』発刊によせて――

仲村睦雄（昭・20年卒）

これは、市報三月号記載の切り抜きです。

この会報が皆様の目に触れる頃にはすでに発刊されております。

四月十六日には、おたまや公園、碧雲寺で「出版記念会」。

「竹田は文化遺産が多い」といわれながら、見元をみつめると見逃していることが多いと気付いて進められた事業です。

「竹田の寺」発刊の目的は、市内外の人々に竹田を知り楽しんでもらうことです。つまり、くらしの中に「竹田の寺」のもつ、歴史性、文化性、そして景観、眺望をとりこみ、心のぜいたくをしてほしい。寺院と市民の新しい関係づくりの足がかりとしたいとの願いがあります。

寺院との新しい関係づくりは、実はこれからです。より多くの市内外の人々にこの「竹田の寺」を読んでいただいて、豊かな市民生活の創造に手をたずさえて努力していきたいとスタッフは考えています。ぜひ関東在住の皆様のお力添えを得たいものと考えます。

注文は、竹田創生館で受付けています。

（一二〇〇円　TEL〇九七四=六二=四一〇〇）

愛染堂・阿南英行画

竹田市は市制四十周年度を迎え、

○　中川墓所（おたまや公園、大船山墓所、小富士山墓所）国指定史跡昇格

○　国重要文化財愛染堂の本体修復完了

○　宮砥神楽の県指定昇格

○　城原神社の楼門完成

そして、

七里に、お城を思わせる竹田市役所の新庁舎落成と文化財関係の修復、昇格、完成がめじろおしです。竹田市にとって、このような年は珍らしいのではないかと思います。

やりようによっては、市民の文化遺産保存振興意識がとみに高まるのではないかと考えています。

「歴史と文化の里」として、より幅がでてくるよう、商家展（内藤家）、甲冑展（ボール紙で本物そっくり）、織姫展（サフラン染）など、面白さ、楽しさが、でてきているのが、昨今の竹田の顔です。

中川公廟　国指定史跡となる

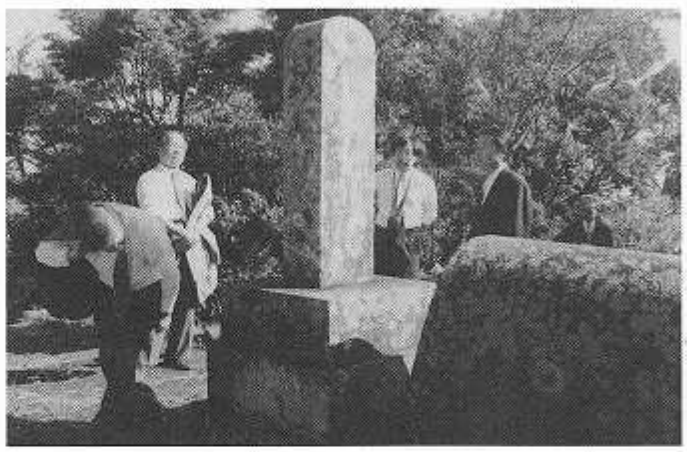
志賀克洋（昭38年卒）

路地行灯がいくつか、武家屋敷通りをほのかに見せる。竹で作られた燭台の灯が、時折揺れる。中川家移封と共に伝えられた、古田織部の心。

四百年の歴史を甦らせる武家茶。竹田創生館の書院と、古田屋敷長屋門での織部流茶事。十一月二十日、この日中川家の墓所が、国指定史跡となる発表がなされた。

初代藩主秀成の死により、菩提寺となった碧雲寺、剃髪後「入山」と称した三代久清の遺言による、大船山の自然に囲まれた儒式の墓所、岡城を眺望する景観絶景の、小富士山に眠る八代久貞の儒式の墓所、旧岡藩領内にあるこの三ケ所が、大名の墓所に対する思想もよく表わされており、その整備と共に保存を図るために、指定されたものである。

少しPRを許してもらえば、三月末に発行する「竹田の寺」は、約二ケ年の調査取材と二十名のスタッフによる労作である。心のよりどころとしてだけでなく、文化や教育の中心であった寺院を、あらためて見直そうとする目的をもって、二十ケ寺をB六判七十頁で紹介している。その碧雲寺の中川家墓地には、初代秀成、二代久盛、四代久恒、五代久通、六代久忠、九代久持、十一代久教の墓が、宝塔や五輪塔によって営まれている。墓塔を覆っていた霊廟建物は、二代久盛の霊屋のみ高流寺に移築され現存する。かつては、霊屋が並んでいた事が、各々の墓所の礎石に跡が残っていることからもうかがえる。今、御成門に続く土塀に囲まれた中に、竜吟池など周辺も整備され、「岡藩主おたまや公園」として一般公開されている。石橋を渡り、飛石を伝い延段に導かれて進むと、白い塀に囲まれた歴代藩主の墓石が、往時のままに残されている。慶長十七年（一六一二）夏、完成を前に死去する秀成。庫裏にある古びた蹲踞は、茶屋を建てる予定であった名残りであろうか。もとは城内にあったものらしいと伝えられる。さながら一幅の山水画を眼前に広げる、北川山麓の切り立った崖。風雨にさらされた石の苔むした様が、長い年月を伝える。時の移ろいに浸る。



桜栄産業株式会社
日本火災ATS上級代理店
代表取締役　後藤鉄石
〒343　越谷市北越谷3－17－7
電話（0489）77－0287

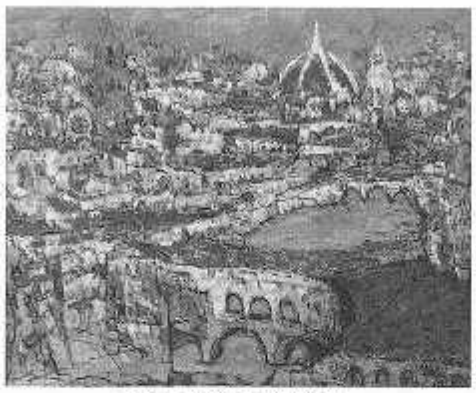
会員の語らい

「川の街」フィレンツェ・京都・竹田

高山英一（昭・17年卒）

☆ルネサンスとフィレンツェ

ルネサンス＝文芸復興。文芸復興＝一四～一六世紀ヨーロッパ。……等々。竹中時代の西洋史の試験で一生懸命に丸暗記した。……京都工芸大時代は美術建築工芸史、イタリアルネサンス編でレオナルド・ダビンチ、ミケランジェロ、ラファエロに出会い、メディチ家の活動そしてヨーロッパ文化芸術への関心と憧憬は今もって私の脳裏に続くのである。ミケランジェロの「ダビデ像」ボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」フラ・アンジェリコの「受胎告知」それらの美術作品を内蔵する教会・美術館・宮殿などイタリア美術作品の1／3は、イタリア中部トスカーナの都「フィレンツェ」にあるのである。アルノ川畔のこの街は世界文芸の中心として人々から親しまれた美しい都である。そのたたずまいは、次の建築群、サンタマリア・デル・フオーレ。ドウモ美術館、シニョール広場のヴェキオ宮、ウフィツィ美術館、フィレンツェ最古のポンテ・ヴェキオ。サンマルコ寺院、ピッティ宮殿、等々数限りない教会と館。メディチ家は現代も息づいているのだ。



竹田市新庁舎に寄贈された
「川の街・フィレンツェ」

☆フィレンツェ紀行

人口46万のフィレンツェの中央を東西にアルノ川が斜塔の町ピザに向って蛇行しその北側の街にサンタマリアノベラ駅や花の聖母寺、南側はミケランジェロ広場、ピティ宮殿の丘が続く。私共夫妻二人連で絵を描く旅での10日間フィレンツェに滞在しスケッチをした。毎朝夕ホテルから街への往復はアルノ川畔の散歩から始まる。川の流れは清く鱒の魚影が川面に映え、両岸は釣人達の姿がいつも絶えない。京都の加茂川辺の散歩を思い出す。フィレンツェと京都は古都で、全くよく似ている。川辺に建つ数多くの教会の鐘の音が…大教会は大きく重く、小教会の音は小さく可愛らしく美しい音色で今も耳に残る。

☆フィレンツェ・京都・竹田を偲う。

フィレンツェと京都は姉妹都市であり、竹田は小京都といわれ、三都はよく似ている。この絵は今年の新槐樹社展出品の「川の街フィレンツェ」と題した百号の油絵で画面の下中央にアルノ川と大小の橋を一際大きく描特にポンテベッキョを制作中机上にたけた広報正月号表紙。竹田市新庁舎図が目に入る。一月頃福岡の弟から竹田西光寺で亡母十三回忌法事の報あり。弟と相談し法事記念に竹田新庁舎の落成祝に「川の街」の絵を寄贈の話もち上り、在京在竹田の同級生関東同窓会長にも同意協力を得この絵を新築市庁舎に飾ることに市長の了承を得た。「川の街フィレンツェ」がルネサンスを思う心と、竹田を偲う私の気持ちが新庁舎に飾られるこの絵を見る人々により末永く続くことになれば幸である。

真打ちに昇進して思うこと

柳亭市馬（本名古藤泰幸・昭・55年卒）

世間では我々の商売を〝落語家〟と称していますが、私は、あくまで〝噺家〟（はなしか）でありたいと常々思っています。噺家には〝前座〟〝二ツ目〟〝真打ち〟と三つの段階があります。昭和五十五年三月に竹高を卒業し、師柳家小さんの内弟子になり前座、同五十九年五月に二ツ目昇進、そして平成五年九月に真打ち昇進と同時に八代目柳亭市馬（りゅうてい・いちば）を襲名致しました。勿論、子供時分から好きな事でしたから落語を興味深く見ていましたが、まさか一生の商売にしようとは、今考えてみても九州の田舎の一高校生が、ずいぶん思い切った事をしたもんだと我ながら感心して…いやあきれかえっています。噺家になろうと決心したのは、二年生から三年生になる頃ですから、家族は当然の事ながら、当時の先生方には、ご迷惑をおかけしたことと思います。うちの師匠の最大にして唯一の道楽が剣道で、私も剣道部に所属していましたから、師範の故吉良和光先生にお願いして、有名な剣道家、故中野八十二先生に「噺家志望の若者がいるから頼む」とお口添えを頂いたのがいきさつで、その頃は、もう弟子をとらないと言っていた師匠も「中野先生のロききなら仕方ねえ」というのですんなり弟子入りを許されました。しかしながら弟子になって一年間ぐらいは、稽古をするといえば剣道の稽古で、落語の稽古は全くなし。大変な所に来たもんだと少なからず心配の日々を送ったものでした。あれから十四年が経ち、真打ちの披露口上を大好きな師匠に願うことが出来、人から〝市馬師匠〟などとお世辞とは知りつつ云われるようになった今、つくづく思う事は、自分は、いろんな方方にいろんな所で世話になって何とか成っているんだということです。これに感謝の気持ちを抱かないわけにはまいりません。もう一つは、師匠の教えでもあり私の生涯の目標でもある人間形成。心の素直でない者が噺をすると噺自体がよこしまなものになります。固い話になりましたが、竹高の卒業生はみんな歌ったんです。〝清きを誓い気を練れと〟

――あとがき――

▲臥牛もお蔭様で十号になりました。石の上にも三年、いや五年、人間ならもう一人歩きのできる頃ですが、「臥牛」は、まさに牛歩の歩みです。なかなか一人歩きができません。皆様のいっそうのご協力をお願いします。

▲今回から、「竹田史跡巡り」をスタートさせました。題して、「知っちょるつもり」といたしました。第一回を「狐頭さま」として、玉来の工藤隆浩氏にご執筆をお願いいたしました。

▲広報委員に異動がありました。岡村光博氏が辞められました。新たに久保博紀氏が仲間に加わりました。よろしくお願いいたします。